



モンゴル・ウランバートル市

喜怒哀楽は建物にも オペラ劇場誕生の歴史

世界銀行タスク・チーム・リーダー 鎌田卓也

WATCH FIRE

【開発途上国の明日】



この建物はモンゴル国立オペラ・バレエ劇場である。

約600人収容の同劇場はこぢんまりしているが、モンゴルの作曲家や演出家が多く優れたオリジナル作品を生み出してきた舞台である。これは同じ社会主義圏だったロシアや東欧に留学生を送るなど、過去に政府が芸術文化育成に注力してきたことにもよるが、民族音楽の豊かさや、同国の芸術家の情熱に負うところも大きい。最近では日本のバレエ団が公演するなど、新たな国際文化交流の場にもなっている。小泉元首相もここで同国のオペラ「チングスハーン」を観賞した。

この劇場は市民生活にすっかり根付いている。たとえば、モンゴル・オペラの代表作「悲しみの三つの丘」は60年以上にわたるロングランだ。昨年末の公演も、満員の聴衆が一斉に手拍子をとったり、旋律を口ずさんだりするという大変な盛り上がりで、フィナーレは大歓声に包まれた。同劇場には悲しい歴史も絡んでいる。司馬遼太郎の著書『街道をゆく5 モンゴル紀行』によると、この建物は第2次世界大戦後、抑留日本人の手により建設された。同国に一万数千人の日本人捕虜が動員され、1割強が強制労働などで落命したという。そんなことを考えると、観客の喜びに満ちた笑顔がとても大切なものに思われた。(写真も筆者)